

# ARTLET

慶應義塾大学アート・センター ARTLET 第63号

## FEATURE ARTICLES

# 都市のカルチュラル・ナラティブを求めて

「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトのあらまし  
慶應義塾大学アート・センター

タイムトラベルの場としての都市  
吉見 俊哉

## INFORMATION

活動報告



上：カルナラ・コレッジ '21の様子、2021年9月  
下：泉岳寺見学会、2023年3月

# 都市のカルチュラル・ナラティブを求めて

2016年末に始動した「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトは、港区の文化機関を緩やかにつなぐグループを形成しながら、様々な活動を展開するユニークなプロジェクトである。

プロジェクト・ページでは、「現代文化の発信地、国際都市として知られる港区は、同時に、多くの寺社仏閣や史跡、そして歴史ある企業が所在する歴史文化都市でもあります。このダイナミックな時間軸をもつ都市文化の眺望を、一層明らかにするためのプロジェクトが、『都市のカルチュラル・ナラティブ』です。」とうたっている。その活動においては、今昔の文化資源や、文化を巡る学術的な成果を相互に連結し、文化の物語(カルチュラル・ナラティブ)を形づくること目指されている。

昨年度をもって、様々な形で外部資金を調達して展開した活動は一段落を迎えた。しかしながら、プロジェクト・メンバーのグループは継続し、今後の活動展開を探っていく予定である。

## 「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトのあらまし

慶應義塾大学アート・センター

### 活動の背景——文化機関から地域へのアプローチ

2016年度に始動した「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトは、慶應義塾大学アート・センターを事務局的なコア組織としながら、港区の文化機関を緩やかにつなぐグループを形成して、様々な活動を展開するユニークなプロジェクトである。

現在、各地域で大規模な再開がなされている港区では高度に情報化する社会変化と連動し、街のありかたや産業が大きく変化している。新たなコミュニティや活動の生成と変容は大都市のダイナミックな魅力だが、近年、その変容の速度が加速度的に高まっている。その結果、変容への対応における世代やデジタル・リテラシー、障がい、ライフステージ、価値観の相違がもたらす分断や孤立が深まっている。このような現状に対して、文化機関はいかなる役割を果たし得るだろうか。文化機関は、文化を継承すると同時に、新しいアプローチの展開などを通じて、時代に即した文化の更新と社

会への再接続を試みている存在だといえよう。新旧の文化を、それぞれの特徴を保持しつつも相互に接続・発展させる、このような営みは、社会と都市の急速な変容がもたらす分断を回避するための重要な実践となり得るだろう。

さらに異なる専門性を持つミュージアムや類縁機関が連携することによって、領域横断的な企画の開催、参加者コミュニティの形成を実際的に進めることが可能となる。港区には、企業が運営する企業博物館や専門図書館、アーカイヴが数多く存在する。小規模な私立美術館も、良質なコレクションをもとに活動を展開し、地域の文化を形成している。これらの文化機関の活動理念は、各機関の運営母体(ペアレント・インスティテュション)の歴史やミッションに強く結びついている。このような文化機関がゆるやかな、しかし実質的な連携を築くことは、多様な文化活動を横断する場を作ることには貢献するだろう。そのためのプラットフォームとなるのが、「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクト(以下、本プロジェクト)である。本プロジェクトは2016年に端を発し、活動資金として主に助成金を獲得しながら、以来8年ほど活動を継続し、プロジェクト参加機関を中心に、地域と連携しながらその間さまざまな活動を展開してきた。そこでは見学会やワークショップのような通常の文化イベント開催だけでなく、同種の取り組みに資するようなモデルケースの構築にも同時に取り組んできた。昨年度

をもって、様々な外部資金を調達しての活動実践は一段落を迎えた。この機会にその成立過程を中心に本プロジェクトの全体像を概観する。

### 活動コンセプトの構築

「都市のカルチュラル・ナラティブ」の土台となるコンセプトの策定に入ったのは2016年のことであった。この年は2020年に予定されていた東京オリンピックの開催を前に、東京都だけでなく国を挙げた文化プログラムの機運醸成を目的に、文化プログラムへの助成が増え始めた時期にあたる。当センターは小規模な研究所であることから、大きな枠組みによる活動には助成金が不可欠でもある。そこで公共の文化プロジェクトの活性化という社会的な動きに連動することで、活動の範囲を拡大しつつ、助成金の獲得を目指すという形で、本プロジェクトは始動した。当初よりワークショップや見学会などさまざまなイベントの開催が想定されたが、活動コンセプトでは、モノを扱うミュージアム／アーカイヴでありながら大学附属の施設であるという当センターの社会的役割の認識を強くもつことになった。つまりミュージアム／アーカイヴとして港区の文化資源を前景化すること、そして大学の施設として、それらを専門的な研究教育活動と接続していくということを、本プロジェクトを展開していく前提となるコンセプトとして掲げた。特にコンセプト策定の当初から欠くべからざる要素として考えられていたのが



左：地域の建築レクチャー、2022年12月  
右：オブジェクト・ベスト・ラーニングのワークショップ、2023年1月

「物語の集積として都市文化を捉える」という観点であり、毎年発行された報告書にもそれは、明確に示されている。

### アーカイヴとしての動機

これに関連して、本プロジェクトの運営上で当センターにはふたつの内発的な動機が存在する。それは、大学アーカイヴとしての動機と、ミュージアムとしての動機である。多彩なアーカイヴを所管している当センターでは、自らを含めて港区内の特色あるアーカイヴや専門図書館の一般への認知度を向上させたいという思いを抱いていた。港区では、美術館での展覧会開催をはじめとしてさまざまな文化イベントが行われ、それらへの一般の関心はもちろん非常に高い。一方そのように開催される展覧会やパフォーマンスなどの背後にあって、イベント開催を可能にしているリサーチ等に脚光が当たることはほとんどない。関心を集めている表の部分だけでなく、その裏側にある専門的な研究教育活動にも光を当て、文化の背後にあってそれを支える取り組みを可視化し、文化の広さと深さへの認識を拡大したいということが、大学アーカイヴとしての動機である。

### ミュージアムとしての動機

本プロジェクトを遂行する上でのミュージアムとしての動機には、当センターが当時博物館相当施設であった（現在は登録博物館）ことが関わっている。当センターは小さいながらも展示室を有しているが、博物館相当施設として活動を開始して数年の2015年、ユネスコの勧告<sup>1)</sup>が出された。この勧告では、これからのミュージアムは立地する地域においてどのような役割を果たすのかを考えるべきと明示されており、当センターの問題意識とも深く関わる内容であった。ほとんどの美術館や博物館は、その地域やそこに住まう人々とのように関わっていくかを多かれ少なかれ公式に検討してきている。しかし大学ミュージアムが所蔵するコレクションは、必ずしもその地域と関係するとは限らない。それまで慶應義塾大学が、地方の国立大学のように、地域と強く結びついた活動をしてこなかったということもあり、当センターは大学ミュージアムとしてどのように地域にアプローチするかについて手探りの状態であったといつてよい。最終的には、研究とともに実践を通してこれについて考えていく場を設ける必要性を認識するに至ったのである。

1) ユネスコ「ミュージアムとコレクションの保存活用、その多様性と社会における役割に関する勧告」2015年。chrome-extension://efaidnbmnfnkpiegljldpihjnkjd/https://wwwj-muse.or.jp/02program/pdf/UNESCO\_RECOMMENDATION\_ENG.pdf

### プロジェクトの活動

港区の文化的景観はそこに住まう人々の歴史の積み重ねによって生み出されたものであり、大規模再開発を繰り返す企業によって紡がれる訳ではな

い。そうであるならば、我々の取り組みが、文化の担い手個人の物語を集積するという様態を取ることとは自然な流れであって、そこにこそ本プロジェクト名が「都市のカルチュラル・ナラティヴ」を冠している理由がある。ともあれこの姿勢は、換言すればヒューマン・スケールを用いた、港区という大都市の文化へのアプローチを示している。そのためどのような形式であれ、いずれも参加する個人が主体としてナラティヴを蓄積し、可視化して共有していくプロセスを重視している。本プロジェクトの参加者が将来的には同種イベントの主催側となり、ナラティヴの蓄積を共有し文化の担い手としての自覚を個人が有することを助けるようになるといった、都市の住民が地域の文化的景観と自らを結びつけ、認識していく自律的な文化サイクルを形成していくことも想定する。こうした活動により、当センターだけでなく、そこに住まう人々が港区の複雑な文化的様態を、複雑さを保ったまま捉えることを目指せばと考へた。より具体的には、さまざまな地域における文化機関でのワークショップ開催だけでなく、定期的に講演会や見学会といった一般的なプログラムも取り入れ、その結果を共有し刊行している。また近年ではミュージアムといった場所以外でのインクルーシヴ・プログラムのあり方についても考察を深め、関係者と議論を重ね、イベントを実践してきた。

### 活動グループ

こうした活動は規模の面でも内容の面でも、当センターのような小規模機関で充足できるものではないため、外部機関の協力が不可欠であった。①企業の研究所でありライブラリーでもある味の素の文化センター、②NHK放送博物館と③NHK放送文化研究所、④現代美術アーカイヴ研究やその実践をしている竹芝のNPO法人ジャパン・カルチュラル・リサーチ・インスティテュート、地域と密着しながら歴史を紡いできた⑤泉岳寺や⑥増上寺のような寺院にも協力を仰いだ。また⑦港区でアート関係の資料を多く保有している草月会（草月会館）や、⑧老舗和菓子の虎屋を母体としたアーカイヴである虎屋文庫、そして⑨科学系の領域から東京海洋大学のマリンサイエンスミュージアムも、本プロジェクトを実行するグループのメンバーである（プロジェクト内での詳しい役割については、末尾の表を参照）。事務局および中核機関を務める当センターを含め、これらの参加機関は比較的小規模ながら公開施設を有しており、しかも多くの資料を所有しているという点が共通している。こうしたそれぞれの方面に強い特色を有する各機関から、特に「都市のカルチュラル・ナラティヴ」というテーマに関心を抱く方々をコアメンバーとして、これまで活動を継続してきた。本プロジェクトでは毎回必ずグループ内の全機関が参加するわけではなく、各年毎の各

チームの業務状況や全体組織内でのゆとり、メンバーの興味関心のありどころによって参加機関は流動的であり、地域の文化活動と同じように緩く繋がりが合いながらさまざまな活動を実践してきたのである。

港区という都市の文化活動においてはモザイク状のあり方こそが地域の特色であり、それはさまざまな担い手、コミュニティや地形によって自然に織りなされてきた文化的景観を形成している。そして現代における再開発を中心とした事業によるこうした文化的景観の喪失を前に、港区にある大学アーカイヴ／大学ミュージアムとして、地域とどのように関わり何を考えるべきかを問う枠組みが「都市のカルチュラル・ナラティヴ」だといえるだろう。この活動は、可視化され難い地域アーカイヴを前景化させながら、さまざまな文化の担い手やそのコミュニティを緩く連関させることで、地域文化同士の断裂を繋ぎ、より豊かで弾力ある都市のあり方を模索することに他ならないだろう。


「都市のカルチュラル・ナラティヴ」活動グループ

参加団体・機関名	事業実施における役割
慶應義塾大学 アート・センター	プロジェクトの企画・運営・事務を担当し、プロジェクト全体の推進を担う。国内外の他地域における事例の調査や、学会発表等を通じたモデルの国際的な発信を行う。
公益財団法人 味の素の文化センター	食文化に関する事業実施・アドバイス。食文化コミュニティおよび専門図書館ネットワークとの接続。高輪地域コミュニティの調査。
NHK放送博物館	放送文化および生活文化に関する事業実施・アドバイス。放送文化コミュニティとの接続。虎ノ門(愛宕)地域コミュニティの調査。
NHK放送文化研究所	放送文化に関する事業実施・アドバイス。放送文化コミュニティとの接続。虎ノ門(愛宕)地域コミュニティの調査。
NPO法人 Japan Cultural Research Institute	現代芸術に関する事業実施・アドバイス。現代芸術コミュニティとの接続。竹芝地域コミュニティの調査。
曹洞宗 萬松山 泉岳寺	寺院文化および伝統文化に関する事業実施・アドバイス。寺院文化コミュニティとの接続。高輪地域コミュニティの調査。
一般財団法人 草月会	いけ花および伝統文化に関する事業実施・アドバイス。いけ花文化コミュニティとの接続。青山地域コミュニティの調査。
大本山 増上寺	寺院文化および伝統文化に関する事業実施・アドバイス。寺院文化コミュニティとの接続。芝地域コミュニティの調査。
株式会社 虎屋 虎屋文庫	食文化および伝統文化に関する事業実施・アドバイス。和菓子文化コミュニティおよび企業アーカイヴネットワークとの接続。赤坂地域コミュニティの調査。
東京海洋大学 ミュージアム機構 マリンサイエンスミュージアム	海洋文化および自然科学領域の実践に関する事業実施・アドバイス。海洋文化コミュニティとの接続。江南地域コミュニティの調査。

「都市のカルチュラル・ナラティヴ」の活動についてはホームページで紹介しております。

<http://www.art-c.keio.ac.jp/research/research-projects/cunary/>

\*『慶應義塾大学アート・センター 年報』および、毎年度発行の活動報告書等、各種印刷物もご参照ください。



「都市のカルチュラル・ナラティヴ」の活動を総括して、新しい展開を考えるにあたり、都市文化論を広く論じ、また、大学の制度や役割についても発信を続けている吉見俊哉氏に当プロジェクトを紹介しつつ、お話を伺った。

出典：地図・空中写真閲覧サービス(国土地理院)

## タイムトラベルの場としての都市

吉見 俊哉

(國學院大学教授・東京大学名誉教授)

TEXT: YOSHIMI Shunya

### 福澤論吉という存在

〔日本の大学の中で、慶應義塾は、創設者(founding father)の思想が現在もなお決定的に重要な意味を持つ数少ない大学という指摘から話は開始した。つまり、慶應義塾のアーカイヴを考える際に福澤論吉の存在が極めて大きく、その福澤と都市のカルチュラル・ナラティヴを関連付ける契機として、福澤の2つの墓(元々埋葬された＝福澤が自ら選んだ墓所＝常光寺(浄土宗)、現在の墓＝福澤家の墓所＝善福寺(浄土真宗)1977年に改葬)が言及され、その墓所についての福澤の選択を三田キャンパスの選択に関連付けて話は展開した。〕

白金から高輪に行く途中に、谷に囲まれた丘に浄土宗のお寺が群れをなしてある、そこだけが島のような高台の帯があります。その高台のへりにあるのが常光寺で、半世紀ほど前まで福澤論吉の墓がありました。かつてはとても見晴らしが良く、海ま

で見渡せたと言います。

福澤はその見晴らしに惚れ、自分の墓の場所を決めて死んだそうです。福澤からすれば、大切なのは家の伝統ではなく、個人でした。彼は死後も、高台から海を見たいと思っていた。彼は、同じような意味で三田の高台を慶應のキャンパスとして選んだのだと思います。自分の墓を海を見渡せるところにしたかったし、三田キャンパスもそうだった。

### 地形からはじまる

東京では、慶應義塾のキャンパスが決まる際にも、福澤が自分の墓を決める際にも、地形が重要だったということなのです。東京という都市のカルチュラル・ナラティヴを決定してきた最も根本的なファクターは、地形だと思います。地形の中で東京という街は育まれてきた。そのことは、明治大正ぐらゐまでは、福澤論吉も夏目漱石も永井荷風も、みんなわかっていた。

つまり、この街の面白さは地形にある。地形と文化が折り合わさっている。絡まり合ってカルチュラル・ナラティヴを作り出している。これが東京の面白さです。ですから、そのような地形と絡んだ東京のカルチュラル・ナラティヴを、大学の周辺でどう考えることができるかが、皆さんのプロジェクトでの問いかけの核心部分にあると思います。

では、慶應の三田キャンパスを地形から考えると、何が最も重要かと言うと、これは間違いなく古川

です。渋谷川と古川は同じ川で、渋谷から恵比寿、広尾、白金と行って、そこからちょっと北上して、ぐるっと高輪の横を通っていき、麻布十番のところから田町の方に抜けて東京湾に出ていく。慶應義塾はこの古川のへりにあるのと似ている。あと、もう一つ重要なのは三田用水あるいは三田上水です。

つまり東京にとって、何よりも重要なのは水の流れて、その一つは川、もう一つは上水です。上水はもともと玉川上水から分かれて行きますが、都心南部の場合は三田用水になって、新宿御苑のあたりから東大駒場キャンパスの横を通って代官山へ出てずっと目黒の方へ進み、そこから白金高輪の方に行き、芝浦に抜けていく上水がありました。上水は高いところを通って水田や畑を潤したり、飲み水になったりしていく水の流れです。傾斜を計算しながら人工的に作った水の流れですから、都心部まで来ると、高いところの上水と低いところの河川の高差が大きくなる。そこで、この上水の水を川まで落とすことで水車を回したり、発電したり、動力源に使われていきます。こういう都市インフラの地理学があるわけです。

慶應周辺の地域を考えるときは、以上のような地形構造が大切です。三田の台地が一体どういう場所であって、なぜそのすぐ裏に麻布十番のような街があるのか。それから、なぜ福澤の墓は海に見える場所から、裏の麻布十番の低い土地に移されたの



白金台の常光寺にある福澤諭吉永眠の地の碑 (撮影 宮崎貴司)



麻布十番の善福寺にある福澤諭吉の墓 (撮影 宮崎貴司)

か、いろんなナラティブがありますね。そこから掘り起こしていくと、慶應義塾とは何かも見えてくるはずですよ。

### 街歩きの鉄則

私は街歩きを多くしていますが、街歩きには三つの鉄則があります。第一は、「もしあなたの前に広い道と狭い道があったら必ず狭い道を行きなさい」。第二は、「もしあなたの前にまっすぐな道と曲がった道があったら必ず曲がった道を行きなさい」。第三は、「もしあなたの前に平らな道と上り下りのある道があったら必ず上り下りのある道を行きなさい」。

つまり、広くてまっすぐで平らな道よりも、狭くて曲がっていて上り下りのある道のほうが絶対に楽しい。実は、これは街歩きだけではなく、学問も人生も同じなのだとよく言っています。

なぜそうなのでしょう？もし、目的地に最も早くに着こうとしたら、広くてまっすぐで平らな道を行った方が必ず早く着ける。ところが、それだと途中の経験が失われてしまうのです。目的のための手段として最も効率的な方法を選ぶとそうなる。これは街歩きとしては邪道なのですね。なぜならば、街歩きは途中のプロセスを楽しむものだから。

そして、この効率性の原理は、街づくりの方法論としても今や邪道になっています。より効率のいい都市をつくるのがいいのだという考え方で、近代

都市計画はまっすぐ広く平らな車道を作ってきて、東京を実に空疎な街にしてきたと僕は思います。むしろ細くて曲がって上り下りのある道は目的地に着くのは遅いけれども、その途中の経験を豊かにする。そのような川筋や路地を残して街づくりをしていくことの大切さが再認識されてきている。

そもそもゆっくり歩くことで、普段は気づいていないものをいろいろ発見するのです。都市の速度を変化させ、スローダウンすることで、普段は気がついていないものを発見することが、都市の中に物語を発見していく作業なのだと思います。速すぎる都市は、都市のナラティブを生まない。

### アーカイブとしての都市

街歩きの方法が、都市のナラティブにとっていかに大切かを話してきました。細く曲がって上り下りがある道を歩いていると、都市が現在の層だけから成り立っている訳ではないことがよく分かってきます。今は21世紀ですが、戦後間もない頃の風景とか、戦前の風景とか、江戸時代の風景とか、もっと前の古代中世の痕跡とか、そういうものにたくさん出会います。

つまり、都市はある種のアーカイブなのです。都市は、現在の平面だけでできている訳ではなく、異なる時代の地層が重層している、層を成している。異なる時代の層が並存している都市を、ゆっくりそれらと接触しながら歩いていく行為は、ある種のタ

イムトラベルです。つまり都市がタイムマシンになっていって、都市を歩くことによって、タイムトラベルをすることができるわけです。それが街歩きの、そして都市の面白さだと思うのです。

そして、街歩きをしているとわかってくるのですが、谷間とか川筋とか細くてくねくねしているところの方が、過去の痕跡がよく残っているわけですね。これは当たり前で、広く平らなところは簡単に再開発できてしまいます。だから最近までは、こういうくねくね曲がっていたりしている道とか、そこに小さい家がへばりついているような地域とか、そういう地域は再開発には適さないと考えられていました。効率が悪いので、そう簡単に開発されない。不動産屋はすぐには手を付けなかった。だから割と古い風景が残っていたのですね。

ところがこのような条件が、近年急速に変わってきてしまった。これが森ビル問題なのですが、細くて狭くて過去の風景を歴史の痕跡として残していた地域を、時間をかけて面を取得して、すっかり風景を変える再開発をして大儲けするモデルを作ったわけですね。森ビルを追いかけているような巨大再開発が似た方向に向かって動いています。

麻布台ヒルズが典型ですが、地形そのものを変えてしまった。だから記憶の痕跡とか、タイムトラベルはもう成立しなくなってしまったのです。都市の過去の記憶、つまり都市のアーカイブ性が完全に否定されている。都市の中で地形が可能にしてきた



三田小山町にあった小山湯(撮影 宮崎貴司)



三田小山町の様子(加藤嶺夫『東京の消えた風景』小学館、2003年)

アーカイブ性は否定されてしまったのです。

ここで、大学が地域と連携してアーカイブ活動することはどういうことなのかという話に戻ると、このような巨大再開発が都市の記憶を根こそぎ消去していく過程に、何らかの仕方で抗わなくてはいけないんだと思います。都市に異なる時間の層が維持され続ける、様々な局所がある。そのまだら模様が都市の魅力を成していると思うし、だからそこを消去してしまっはいけない。

港区は東京の中でも最もそういう場所にあふれていた地域だと思います。

### 港区という場で

港区というと非常に抽象的で掴み所がないのですが、旧麻布区、旧赤坂区、旧芝区が合体して港区になっていると考える必要があります。つまり、麻布には麻布の文化があり、赤坂には赤坂の文化があり、芝には芝の文化がある。麻布の文化は、基本的に旧日本軍の文化であり、赤坂の文化は、政府高官の屋敷や軍関係者をもてなす花街の文化であり、芝の文化は増上寺の文化です。これら全体を覆って、港区の基盤をなしてきたのは寺社地の文化です。港区は、実は台東区に似ていて、基本的に寺町なのです。

江戸はものすごく寺の多い都市でした。なんでこんなに寺が多かったかという、理由は簡単です。参勤交代のために全国の地方から武士が奉公人

を連れて江戸に詰めている。それで江戸の人口はだいたい120、130万と言われますが、そのうち50万以上が武士と奉公人が占めていたようです。ほぼ半数ですね。そして人は死にます。みんな相当長く勤めていて、中々お国に戻れないで、江戸に間に死んでしまう。しかし、当時はまだドライアイスはないですから、その遺体は国元に持って帰ることはできなかった。そこで国元にある宗派と同じ寺を、江戸にも作ることになる。

だから江戸の武士や奉公人たちのために江戸の寺が増えていって、それで江戸というのは際立って寺の多い都市になったのです。

現在の話にどうつながるかという、寺社地は相続税の心配がない。寺があごきな金儲けをしない限り、再開発から守られている。寺社地や学校用地が、再開発に抵抗できる数少ない公共空間なのです。そういう観点から港区を見ると、見え方も違ってくると思います。

### 巨大再開発とカルチュラル・ナラティブ

この都市のカルチュラル・ナラティブをめぐる今日の話の中心は、現代資本主義と都市のカルチュラル・ナラティブの関係です。あるいはタイムトラベルの場としての都市と資本主義的再開発の場としての都市の関係だと言ってもいいかもしれません。そういう意味で港区は、戦後間もない頃から、資本主義の強欲さ、暴力性と、地形とか寺町が持つて

いる複雑な文化と地形がせめぎ合ってきた代表的な場所だと思います。

戦後日本で不動産開発が地域の記憶や風景をすっかり変えてしまった代表例は、西武鉄道を作った堤康次郎によるものです。これは猪瀬直樹さんとか石川達三さんとかが、ノンフィクションや小説で詳しく描いてきたものです。堤康次郎は東京郊外から軽井沢まで、多くの地域で悪名をとどろかせましたが、港区にとっては増上寺の問題ですね。彼は、徳川家の霊廟のあった広大な土地を手に入れ、歴代将軍の墓を掘り起こして改葬し、ももとの土地を東京プリンスホテルにしてしまった。相当やりたい放題にやられてしまったんですね。港区は、何度も不動産再開発によって土地の在り方が根本から変えられてしまった地域です。

今でも、慶應のすぐ近くで巨大再開発による風景の改変が起きています。三田1丁目、昔の三田小山町のことで。三田小山町は、三井倶楽部の台地からずっと下りていったときの、麻布十番の手前にある地域ですね。ここはもともと慶應の学生たちの下宿屋街でした。小山湯という大正時代くらいからの銭湯が残っていたんですけども、全部再開発で消えました。街全体が消滅してしまいました。これから超高層のマンションとオフィスビル街として再開発されていくのでしょうか。そうしたことが、港区は本当にいっぱい起こっている。

ですから、都市のカルチュラル・ナラティブを語り



三田小山町の再開発(撮影 宮崎貴司)



麻布の谷間から元麻布ヒルズを見上げる(撮影 宮崎貴司)

ながら、今はその基盤が掘り崩されつつあることに目を向ける必要があります。カルチュラル・ナラティヴは、都市のあちこちで進行している巨大再開発に対する対抗的なナラティヴにならなくてはいけない。慶應義塾大学の周りでも、ものすごい再開発が次々に起こっているということですね。高輪ゲートウェイのあたり、高輪から麻布にかけての再開発もすさまじい。カルチュラル・ナラティヴは、そういう現代都市の状況とどのように切り結んでいくことができるのでしょうか。

### 奴雁としての大学

そこに、大学の存在意義も出て来るだろうと思います。大学の先生たちは、三井だろうが森ビルだろうが東急だろうが、彼らを正面から批判できるはず。巨大デベロッパーの中でも心ある人は聞く耳を持っていると思います。そのへんは、大学人の使命ですね。

何かのシンポジウムで元塾長だった清家篤さんに教えてもらったのですが、福澤の「奴雁の説」というのがあります。雁は渡り鳥で、川辺で群れになって餌をついばんでいる。しかし、その時に必ず一羽だけ餌もついでに首を長くして常に周りを見ている雁がいる。敵が来ないかとか、常に遠くを見ている。知識人っていうのは奴雁だと言うのが、福澤の文意です。だから大学が、経済効率でものを判断する企業のようになってはいけない。大学は

奴雁精神みたいなものを持っていてはいけないのです。

奴雁は、遠くに大きな鳥や獣が来ていることや天候の急変に最初に気づく。それが大学人です。カルチュラル・ナラティヴという方法で、地域に起きていることを言葉にしていく。特に港区の場合は、やっぱり慶應義塾こそが奴雁になるべきですね。慶應義塾が港区という土地にあること、三田のこの場所から、麻布や高輪、この一帯の巨大再開発に問いを發していくことは、港区にある大学だからこそやるべきことのようにも思います。

### 都市のナラティヴを拓くアートの可能性

今、申し上げてきたような都市の重層性とか、アーカイヴ性あるいはタイムトラベル性というのは、例えば街歩きであれば、ツアーガイドとして解説して、ここの街を歩けば慶應の三田の裏側が見えてきて、ここはだからこうなっていて、そっちはこうなっているから都市の重層性が全部見えてくるということ言えばできます。そういう街歩きの活動を広げていくということも、カルチュラル・ナラティヴの一つの方法論としてあります。

しかし、もっと想像力豊かに都市のアーカイヴ性を来た人たちに開いていくのは、やはりアートですね。ホワイトキューブの美術館の中にアートがあることと、芸術祭みたいな、地方とか路上とかに、サイト・スペシフィックな形でアートがあることの何が違

うのかと言えば、それはコンテクストとの関係が違うのだと思います。ホワイトキューブの美術館の中にあるアートは、アートそのものを見せるわけですよ。だけれども、都市にアートがあるということは、それによって周りの地域とか周りの環境に作用を及ぼしながら、その周りの環境が持っている場所性とか歴史性、その場所の記憶だとか、そういうものを浮かび上がらせる力を持つ。そういうアートが、サイト・スペシフィックなアートとして浮上してきた。

このアートは、ここの場所になくちゃいけないんだという理由がある。そういうアートって、いっぱいあると思う。そうするとそれがあることによって、さっきのまっすぐ平らに広い道をじゃなくて、曲がっていくことによって、曲がつた先にふっとあるアートが存在することによって、その場所に人は目をとめる。そうすると、その場所が持っている意味を再発見するということはあるんだと思います。

慶應義塾大学のアート・センターが地域と連携しながら、じゃあこんなに記憶が消されてしまっている港区で、この記憶を呼び戻す。それは本で書いて歴史を明らかにするというやり方もあるけれども、そうではなくて、そこにぼんと一つアートを置くだけでこの地域の場所の見え方というか、普通の人々にとつてのナラティヴなあり方が、わっと変わってくるような、そういう場所の想像力を喚起するようなアートはどういう形であるのだろうか、ということを考えるということも意味あることだと思います。

## 活動報告

## ■ 展覧会

場所 | 三田キャンパス南別館1階アート・スペース

アート・アーカイブ資料展XXVII「交信詩あるいは書簡と触発：瀧口修造と荒川修作/マドリン・ギンズ」

2025年3月17日(月)～2025年5月30日(金)

瀧口修造(1903-1979)と荒川修作(1936～2010)は様々な形で触発し合う関係にあった。荒川の渡米後、ほどなくして手紙の差出人にマドリン・ギンズ(1941-2014)の名前が加わるが、瀧口の最期にいたるまでその往復書簡は途絶えることがなかった。瀧口は完成にも未完成にも見える自身の手づくり本を「交信詩/交信紙」と呼んでいたが、この概念を字義通り取るならば、書簡のことである。

荒川/ギンズから瀧口へ宛てられた書簡の中には、文字を連ねて用事や近況を伝達することに留まらず、ユーモアや機知に富む方法を用いて書簡を監使し、新たなメディアへと変成させる準作品のような書簡がいくつもある。例えば、メッセージの書かれた古絵葉書の文字を重ねるように新たなメッセージを書き加えたり、印刷された図像に矢印や数語を加えて別の表現を生成させている書簡などのことである。それらは書簡という非常に私的なメディアであるが故に、発信者と受信者にしかわからないある種の秘境性を有する術語が駆使されているかに見える。しかし同時に開かれた濃密な「空白(blank)」を発生させている。書簡(「交信詩」)を共作の場と捉え、その中に蠢く「空白」を通して、瀧口と荒川/ギンズの諸問題を再考することを目指した。

\*本展は富山県美術館(瀧口修造コレクション室)で行われた展覧会「手紙と漂流詩」(2024年11月～2025年2月)、慶應義塾大学で行われたシンポジウム「パピエリエ 02：瀧口修造と荒川修作/マドリン・ギンズ—書簡または余白と空白」(2024年12月)と「手紙」というテーマを共有している。現在、KUAC、荒川修作+マドリン・ギンズ東京事務所、Reversible Destiny Foundationは、瀧口と荒川/ギンズが互いに送りあった書簡整理を共同で進めており、本展示はその整理を背景に企画された。

会期中には、本間桃世氏・松田剛佳氏(荒川修作+マドリン・ギンズ東京事務所)、久保仁志(展示企画者)によるギャラリートークを行った(2025年4月19日(土))。さらに桑田光平氏、塚原史氏、平倉圭氏、本間桃世氏・松田剛佳氏(荒川修作+マドリン・ギンズ東京事務所)、山本浩貴氏(いぬのせなか座)、久保仁志によるシンポジウムを行った(2025年5月24日(土))

「時代に生きよ、時代を超えよ」—— 川口黎爾の直視 2025年6月9日(月)～2025年8月8日(金)

本展では大谷芳久氏(元、画廊「かんらん舎」)の協力のもと、川口黎爾氏のコレクションを中心に展示した。本展の前期に展示された作品の多くは藤牧義夫(1911-1935?)による版画作品である。日本における版画の黎明期に活躍した藤牧の作品は、詩的な情緒を明確に込めているのと同時に、時代を色濃く反映した作品でもあった。藤牧は「時代に生きよ、時代を超えよ」——本展タイトルもここから引いている——という1935年の『新版画』第16号に掲載された散文で、若き芸術家の果たすべき使命を高らかに謳っており、そうした姿勢に川口氏の感応が果たされたのである。さらに林俊衛や長谷川利行らの同時代作品も合わせることで、本展は国内でも貴重な展示機会となった。後期は、川口氏の現代美術コレクションが展示された。そこには、初期にコレクションされたアントニ・タビエスに始まり、プリンキー・パレルモの身を削るようなドローイング、アナ・メンディエタの木の葉に刻印された姿、スタンリー・ブラウンの歩みの痕跡、ハンネ・ダルボーエンの日々の営みが綴る波線のドローイングなどが含まれている。こうした作品は全て、芸術家が自らの生と向き合いながら、深く問いを投げかけた結果として生まれており、本質的な渇きに突き動かされた、その空間と時間を生きる行為であった。それゆえ彼らの作品には、ボイスがパレルモの作品を評したように、「詩的な意味での輝き」が宿り、獲得された存在感が消えることはない。この意味で後期に展示された現代美術作品も藤牧作品と同じ基盤を共有しているといえ、川口氏の「直視」が一貫していることを示している。本展では、来場者にも川口氏の「直視」を追体験してもらうことができたといえるだろう。

会期中には、元「かんらん舎」大谷氏による講演会を実施した(2025年7月5日(土))。

SHOW-CASE PROJECT Extra-2 雷井大裕 接点の都合 2025年10月14日(月)～2025年12月19日(金)

アート・センターでは、大学という若い世代が学ぶ場において、同時代を生きるアーティストたちの作品と出会い、多様な視点に触れる機会を作るという観点から、現代美術展を企画してきた。昨年度より、雷井大裕氏と3年間にわたり展覧会を開催するプロジェクトに取り組んでいる。

2回目となる本展では、展示室外エントランスに置かれた旧作2点、室内に入ると11組のステンレス製の定規の組み合わせが床面に展開する。壁面には段ボールを用いた作品が設置され、床面の作品と共に空間を構成している。「接点の都合」と題された今回の展示では、接点の設け方によって作品が成立し、作り出されていた。既製品を用い、その新たな側面を見出す姿勢は正に雷井作品の王道であるが、床面に展開する11組の定規は、目盛りという機能を保持しながら、日常とは異なる姿を示し、作品となっている。しかも11組には相互の関係性が生じ、全体として空間を構成する作品として成り立っていると言っており、そこには雷井作品の典型を示しながら、新しい展開の萌芽が感じられた。3回連続展示の2回目は、1回目を受け3回目につなぐという位置にある。そのことも意識されながらこの作品は誕生したと言えるだろう。そしてまた、床と壁、そして、エントランスと空間を渡りながらそれをつなぐ展示の広がりにも、「接点の都合」の展開を見ることができよう。

会期中には作家による粘土を用いたワークショップを実施した(ワークショップ：接点の像 2025年10月25日(土))。粘土を手で触らずに造形する。へら、割り箸、木片など、道具を介して粘土に接することによって、接点を意識するとともに、人間の接する道具である「手」を意識することになる。まさに接点について思考するワークショップとなった。さらに、雷井氏、林卓行氏(東京藝術大学教授)、梅津元氏(批評家/キュレーター)3人によるトークを行った(トーク：「接点の都合」雷井大裕のA面を見る 2025年11月15日(土))。2人が雷井の作品を起点しつつ、響き合う他作家の作品を並置し、言語展開からの深読みへの解釈を見せる中、過去作品も引き出し応戦する雷井という、和やかでありながらスリリングなトークであった。

## ■ 催事

2025年度慶應義塾大学新入生歓迎行事 今貂子舞踏公演『慧星』 2025年5月21日(水) 日吉キャンパス 来住舎イベントテラス

2025年度の舞踏公演を依頼した今貂子は、京都を中心に活躍する舞踏家であり、日本舞踊や京都に残る伝統文化を自身の作品に取り入れつつ、深い精神性を、強い陰影を映し出す舞台美術と、大胆に肉体を晒す踊りによって表現し続けている。2019年の『闇の艶』添付のリーフレットに今貂子は次のように記している：「いつしか、芸能の源流にみられる古代の(たまふり(命の活性化))の力を探求し、現代のヴァンギルドな舞踏の中に蘇らせることをめざした。」今回の公演『慧星』は、まさに、この命の活性化を感じさせる公演となった。今貂子は、日本の伝統芸能と前衛芸術を合体させ、常に新しい形の舞踏を生み出そうしているが、他方、教育の現場にふさわしい公演を実現することに何度も配慮してくれた。

本催事の当初の理念である「心と頭と体」のバランスが、特に学生や一般人の間でも、現在、大きく崩れつつある。この(心―頭―体)は、本来、一体であり、それが相互的ネットワークとして繋がっていなければ、人間の生活は歪み、やがては、社会は大きな困難を背負うことになる。その意味で、慶應義塾新入生にとっては、今回の舞踏とその肉体の芸術表現は、そのことを改めて振り返る機会となった。また、RYOTAROの生演奏、今貂子の舞踏と素晴らしいコラボレーションとなり、観客に感動を与えた。なお、全編がDMCによって記録されている。公演後、舞台上で小菅隼人x今貂子でポスト・パフォーマンス・トークを行った。このトークにおいても今貂子は今回の公演のコンセプトと新入生へのメッセージを送り、最後に質疑にも答えてくれた。公演とトークはYouTube公開されている。

建築プロムナード——建築特別公開日 2025年10月30日(木)～11月1日(土) 三田キャンパス

ART WEEK TOKYO シンポジウム/ラウンドテーブル 2025年11月7日(金) 三田キャンパス 西校舎ホール/旧ノグチ・ルーム

触覚鑑賞ワークショップ——彫刻を洗う、楽しむ 2025年11月26日(水) 三田キャンパス構内

国際文化会館 特別講義・見学会 2025年12月4日(木) 国際文化会館

瀧口修造研究会特別例会 パピエリエ 03：第五の季節—瀧口修造とジュアン・ミロ

2025年12月6日(土) 三田キャンパス 東館6階 G-Lab

没後40年 土方巽を語ること 2026年1月21日(水)

アムバルワリア祭XV 戦争と遊歩とニーチェ——昭和10年代の西脇と萩原をめぐる

2026年1月24日(土) 三田キャンパス 東館6階 G-Lab

「建築プロムナード——建築特別公開日」関連ワークショップ 触覚鑑賞ワークショップ——彫刻を楽しむ

2026年2月25日(水) 三田キャンパス 北館

## ■ プロジェクト

【令和7年度文化庁メディア芸術アーカイブ推進支援事業】

KUAC Cinematheque 4: 状況劇場「蛇姫様」上映会—単独性と反復または記録についてII

2026年1月17日(土) VICアンダーグラウンド劇場

ARTLET 第63号

発行日：2026年3月31日

編集：後藤文子

脇田 玲

糸川麻里生

渡部葉子

市川佳世子

高野泰彦

新倉慎彰

星野 琉

制作：図録社

発行：慶應義塾大学アート・センター

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

TEL：03-5427-1621(直通)

FAX：03-5427-1620

http://www.art-c.keio.ac.jp/

E-mail:ac-office@art-c.keio.ac.jp

COPYRIGHT ©2026  
BY KEIO UNIVERSITY ART CENTER

アート・センターでは、講演会、ワークショップなどの催しや研究活動を随時企画しております。詳細についてはセンターHPをご覧ください。



慶應義塾大学  
アート・センター  
KEIO UNIVERSITY ART CENTER